群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

Center News

Center for Cooperative Research and Development on School Education
Faculty of Education, Gunma University

第４号
（2016年３月31日発行）

「学び合う仲間による教員研修リレー講座」における現職教員の真剣なまなざし

目次

２● 巻頭言：センター長就任にあたって
３● 寄　稿：「学び合う仲間による教員研修リレー講座」からの学び
４● 寄　稿：群馬大学教育実践研究の更なる充実に向けて
５● 寄　稿：着任にあたって
６● 報　告：学校経営サロン・学校経営サロンでの出会い
７● 報　告：附属幼稚園・附属小学校から
８● 報　告：附属中学校・附属特別支援学校から
９● 報　告：学部と附属学校園との連携による教育・研究に向けて
10● 報　告：子ども総合サポートセンター事業概要
11● 報　告：附属小学校における取組―提案授業・授業研究会―
12● 報　告：現職教員の成長を促す温かな学び合いの場
13● 報　告：教育臨床心理部門の取組
14● 報　告：群馬大学教育実践研究33号発行のお知らせ
15● 報　告：センター協議会・全国教育実習研究部門会議・資料室利用状況
16● 報　告：次年度へ向けた新しい取組の紹介

巻頭言

センター長就任にあたって

附属学校教育臨床総合センター長　**上　原　景　子**

2015年度から，前任の黒羽教授に代わり，附属学校教育臨床総合センター長を務めさせていただくことになりました。センターをより良くするため，尽力して参りますので，どうぞよろしくお願いいたします。

本センターは，「教育実践に関する臨床の学の創出」とその成果を踏まえた教育，研修，支援を行うことを主な使命としています。2013年の７月に行った改組から，それまでの「教育実習・実践開発部門」「国際理解教育部門」「教育臨床心理部門」の三部門に加えて，三つのセンター「子ども総合サポートセンター」「教員養成ＦＤセンター」「学部･附属学校共同研究センター」で活動を行っています。これらの部門とセンターを貫く大きな目的は，大学と学校現場との協働的・実践的な研究を通して，今日の学校教育課題（いじめ，不登校，教師のストレスなど）の解決に資する実践的指針を見出していくことです。このことにより，地域の教育や学校現場への貢献だけでなく，本学部の学生に対しても大きな教育効果が得られると考えています。

群馬大学教育学部の教員養成は，群馬県教育委員会との連携の関わる協議会の中で，「地域とともに行う教員養成」という視点を取り入れました。そして，「実践的指導力と高度な専門性を兼ね備えた教員養成を目指す大学―学校現場往還型カリキュラム」として，１年次の教育現場体験学習，２年次の授業実践基礎学習，３年次の本実習，４年次の教職実践インターンシップを体系的に整備し，実施しています。学校現場を，これまでの「生徒」という視点でなく，「教師」という視点で体験的に学んでは，大学での学修を進めることを段階的に繰り返し，教師としての素地を築いていくプログラムは，非常に効果のあるものであると評価されています。加えて，３年次の本実習では，基礎としてのＡ実習を５週間，応用としてのＢ実習を３週間行う点で，全国でも例のない充実した実習となっています。

このような学校現場往還型カリキュラムが行えるのは，県市町村教育委員会ならびに実習に協力してくださる数多くの学校のご理解とご協力の賜物です。今後もセンター職員一丸となって，地域に開かれ，また，地域と学部を結ぶ役割を一層効果的に担っていきますので，今後もご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

● 寄　稿

「学び合う仲間による教員研修リレー講座」からの学び

山形大学　木　村　松　子

○「現代的学校教育課題」とは

30年間の小学校教員生活を終えて，現在，コーデイネーターとして大学の組織改革に関わっている。総務担当理事の下で，大学における女性研究者や女性上位職者を増やすため，意識改革や支援制度構築に取り組んでいる。仕事柄，大学，企業，行政，地域の方々等，国内外を問わず様々な方とお会いし，その都度，目を開かされるような刺激を受けている。社会の変化とそれに対応しようとする人々の動きから学ぶことが多い。

先日，理事が，「そろそろ大学も，ＬＧＰＴ（性的少数者）への対応を考えなければならない」と，パナソニックが同姓婚を認める方針を決定した報道を受けてつぶやいた。日本社会ではまだ偏見もあろうが，ようやく光が当たり，就業規則の見直しにまで進もうとしてきていることは確かである。

学校という組織の中で，私たちは子ども達が生涯を生きるための基礎づくりを行ってきたが，同時にある種の偏見も植え付けてきていたかもしれない，と考えることがある。批判力も未熟な小学生や自己アイデンティティの確立に向けて多感な時期の中学・高校生を抱える学校や教師が，現代的学校教育課題に敏感であることは重要である。

一方で，私自身が経験したのは，毎日の多様な課題に直面し，振り回され，悩んでいたことである。心のバランスを取るために，原因を外に向け，嘆いたり，あきらめたりしてきた。しかし，特にこだわりを持っていたジェンダー問題を自分なりに追究する機会を，現職教員派遣による大学院という場で得られたことは幸せであった。課題を把握し，方法を探り，解決していくのは自分自身である。ただ，関心は異なっていても，追究する者同士の学び合い，支え合いがあったことで助けられた。

○解決に向けた「学びのネットワークづくり」とは

本リレー講座は，現代的学校教育課題の解決に向けて，学びのネットワークづくりを目指している講座で，学校教育臨床総合センターの黒羽正見氏が，現職教師を支援する体制づくりの一環として，かねてから目指していたものである。日々，子ども達に向き合い，課題にぶつかり，対応するのは個々の教師であり，学びを必要としている。その学びを支えるのは，学び合う者同士である，という信念を氏は持っておられる。多くの学校の校内研修にもたずさわり，同様の考え方で研究協議をラウンドテーブル形式へと推進されてこられた。従来の組織上の指導・助言体制を，研修の場では敢えてフラットな体制に変えようと試みられている。

本講座が始まって４年目となる平成27年度も10講座が開講され，その内の一つ「国語教材から学ぶケアリング」を担当させていただいた。小学校２年生の「スイミー」は，協力してまぐろを追い出す闘いの話なのか，おびえる仲間の回復を図る話なのか，提起させていただいた。元々は，授業研究の際の指導主事の指導に疑問をもったことから出発し，原著，訳本，教科書教材の比較検討と30以上の授業実践を見る中で，教師の解釈に「追い出すこと」に重点を置く傾向があることに気づいた教材である。

この教材を介して，参加された学生，経験年数の異なる教師，管理職の方，お一人お一人のお話しを伺った時，これまでに経験されてきたことや実践の中で大事にされてきたことを知ることができた。それは，この絵本の原著者のメッセージに通じるものであった。自由の大切さ，芸術の役割，他者の問題を一緒に解決する行為，上下関係ではないケアリング関係等々，教材解釈の質を参加者の力で豊かにすることを新ためて学ぶことができた。

疑問にぶつかった時，偏見や硬直に気づくためにも，学びのネットワークを求めていきたいものである。

寄　稿

群馬大学教育実践研究の更なる充実に向けて

紀要編集委員長　**佐　野　　史**

今，私の目の前には群馬大学教育実践研究第33号の念校が積まれている。手塩にかけたとまでは言わないものの，自分が関わったこれらの原稿が冊子体やCD-ROMの形となり，リポジトリで公開され，やがて大勢の人に読まれると思うと，多少の感慨は否めない。

ここで大切なのは「大勢の人に読まれる」という部分である。人の目に触れる形に作り上げる以上，人の目に触れなければ意味がないのである。しかし正直な話，どこかからお叱りを受けそうであるが，丸々一冊分の群馬大学教育実践研究の論文に目を通したのは，編集委員長を仰せつかった今回が始めてであった。通読して感じたことは，教育学部に関わる研究の多様性である。執筆要項にあるとおり，群馬大学教育実践研究は「主として教科教育，教育実践および教育臨床に関する論文を掲載する」ものであり，この時点でもかなり広い分野を対象としていることがわかるが，さらに教科教育といっても学部では10専攻に分かれるほどだし，教育実践といっても幼児教育から小，中，高，大学，特別支援教育まで対象はさまざまである。論文の内容も，提言のようなものから新しい教材の実践研究，公共施設でのプロジェクトの報告まで自由度が高い。もっと類型ごとに整理すべきであるとの議論ももちろん存在するが，個人的には，むしろこの多様性こそが教育という二文字が抱え込んでいる課題の幅広さ，奥深さをよく表しているように思えて興味深い。

しかし，これだけ多種多様な論文が列挙されていると，ほとんどの読者は端から読むことはせず，検索や孫引きで出てきた論文や，タイトルから関心のある分野の論文と判断されるものだけを読むことが多く，このような多様性を実感することはないのではないだろうか。特に，冊子体の頃はぱらぱらとめくって目に留まった写真や図や言葉があればその部分を読んでみるといった読み方もあったと思うが，平成20年度からデジタル化されて目的の論文に直接到達できる利便性を得た半面，そういった“乱読”は難しくなったように思う。そこで，この拙稿を読んでくださっている皆さんに一言。流し読みでかまわないので，群馬大学教育実践研究第33巻をぜひ通読してみてください。そうすることで皆さんは新たな何かを得られる可能性があります。また，結果としてその論文は想定よりも多くの人に読んでもらえたことになるので，送り出した側としては本望です（ちなみに群馬県地域共同リポジトリAKAGIでは１報ずつしか読めませんが，CD-ROM版は「全編」というボタンで全体を読むことができます）。

。。。と，喉元過ぎれば何とやらで前向きな話を書いてきたが，今年度は年度途中で事務の交代があったこともあり，編集作業は完全にスムーズとはいかなかった。こちらの不行き届きで二度手間をおかけしたりした執筆者にはお詫びを，頼りない委員長のもとでしっかり作業をしてくださった編集委員の皆さまとセンター事務には感謝を申し上げたい。ただ，最後に少しだけグチを書かせていただくと，執筆する側から編集する側に回ってみて，一部の執筆者がいい加減であきれることもあった。まず，ありがちなことではあるし，こちらがミスした場合もあったが，原稿段階から二校まで，全原稿が〆切までに揃ったことは一度もなかった。図や表が読みにくいものや誤字脱字が多々あるものなど，担当者が査読に苦労した原稿もあった。また，執筆要項に書いてあるとおりの体裁の原稿はむしろ少なく，査読に回す際などに若干の工夫が必要であった。実は執筆要項の修正は前委員長からも申し送りがあった懸案事項であり，昭和60年の制定以来19回もの改訂を経て煩雑になっているだけでなく，現状に合わない部分や整理が必要な部分があるようである。そのせいで執筆しづらいことも前述したいい加減さを生む一因かもしれない。なるべく今年度中（といってもあとわずかであるが）に執筆要項を整理しなおし，執筆者，編集委員会ともに，今まで以上に中身を充実させることに注力できるようにしたいと考えている。来年度以降の群馬大学教育実践研究にも乞うご期待である。

● 寄　稿

着任にあたって

附属学校教育臨床総合センター准教授　　吉　田　浩　之

1．はじめに

学校教育に対する多様な要求に対し，柔軟かつ効果的に応えられる高度な専門的知識・技術と豊かな人間性を身に付けた実践的指導力のある教育者の養成が大きな課題とされる中，群馬大学教育学部は，明治６年にさかのぼる教員養成の歴史を有し，地域教育界への貢献を積み重ねながら，今日的な教育者養成上の課題に対応し地域教育の活性化に貢献し続けています。とりわけ，学部の教員養成段階から学生の教育実践能力を高めるために，３年生時後期に附属学校と公立学校の両方で実施する教育実習に代表されるように，学校現場での教育実践体験を１年生時から系統的にカリキュラムの中に仕組み，学校現場での体験と学部での専門科目学修の融合を具現化しています。

そして附属学校教育臨床総合センターは，上述の実践科目を推進し，子どもの成長をめぐる諸問題の解決力を身につけた教育実践力のある学校教員養成に寄与する要の組織として，また教員養成は大学，教員研修は教育委員会という枠組みを発展的に融合し，地域や学校現場に実践的に貢献する先導的組織として，附属学校園，教育委員会，学校等と協働で，教員養成及び教員研修を具体的に推進しています。

この度，群馬大学教育学部・附属学校教育臨床総合センターの専任教員として着任し，あらためて，研究・教育・社会貢献等の責務を全力で果たしたいと気を引き締めているところです。

2．専門分野の紹介

着任にあたり，これまで学校教育に関する研究･教育で力を入れてきたことを僭越ながら紹介し，お読み頂いた方々からみて，今後（これから），何らかのお役に立てるところがあれば，声をかけて頂く資料になればと思います。特に力を入れてきたのは，生徒指導，学級経営，部活動教育です。それぞれの概要は以下の通りです。

１つめは生徒指導です。公立中学校で生徒指導主事（８年間）を務め，学校全体の組織的生徒指導の主導的役割を担った経験があります。それを基盤に生徒指導の実践的研究に取り組み，その内容や成果を生徒指導専門誌「月刊 生徒指導」（学事出版）の連載担当（2006年４月～ 2011年３月，５年間毎月号）を通じて発信しました。最近は，いじめ防止対策推進法（2013年９月施行）により組織的生徒指導の実行が一層求められる中で，法規上の規定に具体的に対応する学校現場用の参考テキストを作成し，教育委員会等を通じて学校現場に役立つように努めています。

２つめは学級経営です。学校の時間割上で整理できる日課的な場面･時間帯（登校･教室入室，朝学習･朝の会，授業，休み時間など）から学級経営にアプローチする実証的研究に，17年間（1994 ～ 2011年度）で公立学校の227学級を調査対象として取り組み，研究成果を単行本の刊行を通じて発信しました。また，高知市教育委員会より高知市教育アドバイザーの委嘱を受け（2009 ～ 2012年度），その立場から，当該教育員会および先生方とほぼ毎月，学級を軸にした生徒指導や授業・学力向上に関する理論研修と実践事例の検討を積み重ね，教育実践資料の作成に共同で取り組んできました。

３つめは部活動教育です。研究代表者として科学研究費採択研究（2011～2013年度，2014～2016年度）の中で，部活動の教育目標到達度尺度を作成し，尺度項目にアンケート形式で回答することで，チームと個人の部活動における学びの状況が，グラフ等で表示されるシステムを開発し市販を開始しています。なお，2013年度から三重県教育委員会主催の「部活動マネージメント研修会」が実施され，その中で本尺度を基準に参加教師の実践事例の効果検討が行われています。また，前任の琉球大学教育学部では，教職科目及び免許更新講習科目として「部活動教育の理論と実践」を開設し，教員養成と教員研修に役立つようにしました。そのような教育・研究活動について，文部科学大臣及び担当官に直接に説明する機会が設定され，励みになったところです。

● 報　告

群馬大学学校経営サロン

教職リーダー講座　**髙　橋　　望**

2015年度より，学校経営サロンが始まりました。学校経営サロンとは，現職の先生方と大学教員が，学校経営について自由に語る場のことです。「サロン」と命名した理由は，「研究会」のように堅苦しくない雰囲気の中で，日頃感じていること，考えていることなどを，ざっくばらんに語る場を設けたいという思いがあったからです。日々の教育実践，あるいは実践をしていく中で感じている疑問など，他校の先生方や大学教員と語り合うことで，日々の実践に対するヒントが得られるのではないかと考えています。

今年度は，主に毎月第４水曜日の19：00～20：30に，群馬大学荒牧キャンパスの教育学部附属教育臨床センター内でサロンを開催してきました。ご参加いただいた先生方からの要望を踏まえ，設定された主なテーマは，以下の通りです。

「学校組織とは？」　「学び合う共同体」　「今，学校が抱える課題とは？」
「校内研修のおける授業検討会のあり方」　「協働のあり方」　「職員室の雰囲気」

平日の夜にもかかわらず，前橋市内だけなく，高崎，藤岡，桐生，伊勢崎，吾妻・利根など，県内各地から，そして，50代から初任者まで，幅広い年齢やキャリアの方々にご参加いただきました。「学校経営というと難しいイメージがあったが，参加したらそんなことは全くなかった」とおっしゃる先生方も多くいらっしゃいました。また，若手の先生方も，最初こそはなかなか発言も見られませんでしたが，次第に積極的に参加される様子も見られるようになりました。

ある参加者の言葉です。「初めはなかなか難しい内容だと思っていたのですが，各学校でのちょっとした話をうかがっていると，世界が広がるなと感じました。また明日から職場で頑張ろう，と思えるようになれました。」

先生方が少しでも元気になれるよう，サロンをご活用いただければ幸いです。

学校経営サロンでの出会い

藤岡市立藤岡第二小学校　**藤　巻　直　子**

学校経営サロンで多くの方に出会うことができました。大学教員である研究者と呼ばれる方々。校長，指導主事，ベテランから採用一年目まで幅広い年齢層の先生方。勤務地も県内各地，各校種にひろがっています。さらには，教育学部の学生やニュージーランドの初等学校の校長先生まで…。一日の勤務を終えた後の平日の夜に，こんな方たちと出会えるなんて，何だか得した気分になります。大学と学校現場というそれぞれのフィールドを越えて，人と人とがつながることのよさを実感しました。　そうした人々との出会いは，自分が当たり前だと思っていたこととは違う現実や違う見方に触れる機会をもたらしてくれます。時には，「私はそうは思わないな。」という意見にも遭遇します。しかし，自分とは違う意見に触れることは，「違う」と感じる自分の価値観との出会いでもあるのだと思いました。

「学校経営」というと，管理職の先生方が行うものというイメージがあります。でも，本当はすべての教職員がそれぞれの持ち場で取り組んでいることが，「学校経営＝学校づくり」につながっているのだと思います。一緒に楽しくおしゃべりする中で，「今いるところをもっとよくするための工夫」について考えてみませんか。サロンでお会いできることを楽しみにしています。

報　告

附属幼稚園から

附属幼稚園　中　村　　崇

今年度は，「自分を出すって面白い!?　～幼児一人一人の「自分なりの表現」を大切にする保育～」を研究主題に，幼児の自分を表そうとする心情や意欲をはぐくむ教師の援助や環境の構成の在り方を追究してきました。本研究では，「全ての幼児は，何らかの方法で自己を表現している」という視座に立ち，一見自己を表現していないように見えるが，その幼児なりに自己を表現している可能性が感じ取れる場面を事例として記述しました。その事例を基に保育カンファレンスを行い，幼児の「自分なりの表現」に関する徴表，「見る・真似る」「他者からの気付きを待つ」「本心ではない言葉」の３点を見出しました。そして幼児が，「めざす姿」に向かっていく過程で必要な教師の援助や環境の構成などの教師の役割について考察を行い，実践で活用できる知見を得ることができました。これは，現象学的な見地から考察を行ったということです。すなわち，一人一人の「自分なりの表現」に内在する本質的な意味に目を向け幼児を理解し，教師の役割を探ってきた成果です。

また，指導計画の見直しも行いました。特に「製作」という項目を全て削除して，新たに「造形について」を掲載することにしました。従来の「製作」は，行事や全体活動を想定した活動を想起させるような記載でしたが，幼児の造形活動は主に「思い思いの遊び」に頻出し，それをねらいに向かうように教師が援助する教育活動が，幼稚園教育の本質であると考えます。そこで誤解を招くおそれがある記載を止め，素材や道具・表現方法等の留意点を「切る」「描く」「貼る」などの視点でまとめました。

６月・10月には，県内外から300名を超える参会者を迎え，公開研究会を実施しました。来年度の公開研究会（６月）には，上述の研究成果を発表しますので，ご参会くださいますようお願いいたします。

附属小学校から

附属小学校　星　野　浩　章

附属小学校では，「知を創造する子どもの育成」を研究主題に掲げ，本年次は，副主題を「協働性を発揮する活動における外化の促進」と設定し，これからの教育で求められるアクティブ・ラーニングにつながる教育研究を進めてきました。各教科等においては単元・題材を通して，子どもたちが創り出してきた知識・技能を再構成する内容やその姿を明確にするとともに，具体的な指導上の工夫をしてきました。学部の先生方の研究へのご協力や，県教育委員会の指導主事の先生にご指導をいただきながら，計11回の提案授業及び各教科等部による部内授業を通して，研究の検証を重ねてきました。研究の成果については，来年度の公開研究会で発表したいと考えております。

また，今年度は，教育実習生や教職経験が比較的浅い先生方の手引きとなる「新　教師へのとびら」を活用しての初めての実習が行われました。多くの実習生が，この図書を参考にし，教育内容・方法・教材を整理しながら，熱心に授業づくりに取り組む姿が見られました。

今後も，本校の研究や教育活動の成果を地域に広め，参考にしていただけるように，より実践的な研究や取組を進めていきたいと考えています。

算数科の提案授業風景

報　告

附属中学校から

附属中学校　矢　嶋　将　之

今年度は年度当初からの校舎改修のため９月の公開研究会の実施を見送りましたが，それに代わる公開授業実践を５月に実施し，活発に教育研究を進めています。研究主題は，学校教育目標「共生」「創造」「健康」を具現化するものとして，教科研究，道徳，学活，学校保健のそれぞれについて設定しています。

研究主題は『教科の本質に迫る授業の創造Ⅱ』（２年次）で，まとめの年となりました。副題を「～考える力を育てる「つながり」づくり～」とし，生徒が基礎的・基本的な知識・技術を活用できるまでに理解を深め別の学習にも応用できる，心理学でいうところの「転移」を促す授業づくりをめざしました。そこでのキーワードは「つながり」です。生徒に断片的な知識や体験を施すだけではなく，それらの「つながり」を意識させる手だてを講じることで，応用可能な力の醸成，ひいては転移を促すことができるという仮説をもって研究を進めてきました。

道徳では『対話を通して価値に対する理解を深め，よりよく生きようとする生徒の育成』を主題に掲げ，教師と生徒，また生徒同士の対話を通して道徳的な価値の理解を深めることをめざしました。学活では『集団決定による話合いを中核とした，自治的な活動を継続できる集団づくり』を主題に掲げ，様々な場面において話合いの実践を通じて各々が主体性を持って活躍できる集団づくりをめざす授業実践を研究しました。学校保健では『睡眠の大切さを理解し，よりよい生活スタイルを確立できる生徒の育成』を主題に掲げ，睡眠という最も基本的な生活課題の改善について，養護教諭が直接的に生徒に働きかけて生徒の活動を活発化する実践を進めてきました。

公開実践授業　学活の授業風景

次年度からは「創造」に関わる研究に取り組みます。これまでの研究の成果と課題を生かし，今後も研究を深めていこうと考えています。

附属特別支援学校から

附属特別支援学校　山　田　雅　之

本校では，開校以来「子どもがいて，学校がある」を信条として，子どもの自立や社会参加を目指し，一人一人に合わせた教育活動を行うことを大切にしていきました。そのため，個別の教育的ニーズを把握して個別に教育課程を編成し，運用してきました。そして，子どもが授業で身に付けたことを評価し，授業改善を行ったり，次年度の教育課程の編成や個別の指導計画の作成などに生かしたりしてきました。

平成25年度から，「学びを生かし，生き生きとしたくらしを拓く児童生徒の育成」を研究主題としました。平成27年度の研究では，副主題を「子どもの学びをつなぐ個別の教育支援計画を活用した授業実践」とし，一人一人の教育的ニーズに応じた指導及び支援によって，子どもが必要な力を身に付け，その力を学校，家庭，地域で発揮できるよう，次の２つの点を重視し，研究に取り組みました。１つ目は，子どもの願いや実態を踏まえた目標設定と単元における子どもの姿から思考の変容を見取った評価を行うことです。単元構想では，子どもの実態や願いなどの情報と，個別の指導計画や個別の教育支援計画の評価を視点とすることで，適切な目標や支援の方法を考えることができました。学びを評価する際には，子どもが目標を達成するまでの姿や目標を達成している姿を想定することで，授業での子どもの変容を教師が見取り，評価することができました。また，子ども自身が目標を立てるようにすることで，その目標に向かうまでの過程で，子ども自身が自己評価を行っていくことができました。２つ目は，子どもの願う姿に向けて，関係機関と共に，将来を見とおした支援や環境設定に取り組むことです。個別の教育支援計画から関係機関にとって必要であると考えた実態や支援の方法などの情報を導き出し，「プロフィール」としてＡ４用紙１枚にそれらの情報をまとめ，学校，家庭，関係機関で共有することで，子どもの将来の願う姿を共通なものとし，支援や環境設定に取り組むことができました。

平成27年度の成果として，子どもの姿を見取った評価や関係機関との更なる連携を図ることができました。今後も，将来の子どもが願う姿に向け，子どもが身に付けた力を地域社会で発揮していくことができるように，日々の授業実践の充実を図りながら，個別の支援を提供できるようにしていくことを追求していこうと考えています。

● 報　告

学部と附属学校園との連携による教育・研究に向けて

教員養成ＦＤセンター長　**藤　本　宗　利**

ＦＤセンターの主な活動としては，新任学部教員の研修会，附属学校園で行われる公開研究会や教育実習の授業参観，授業研究会への参加，教育サロンでの学部教員と附属学校園の教員との意見交換などがあげられる。

今年度は新任教員が７名と，比較的多かったこともあり，また附属小学校・附属中学校の先生方から，たいへん力のこもった資料提供をしていただけたこともあって，教育現場からみた授業研究や教育実習の話題をめぐって，毎回熱意ある姿勢で話し合いが行われていた。

当センターは今後も，附属学校園と学部の教員とが，相互の研究や教育においていっそうの連携をはかってゆくための，窓口としての役割を果たせるようつとめていきたい。

１　新任学部教員研修会

新任教員７名を迎え，４月13日(月)に新任学部教員研修会を開催した。「教育学部の歴史，組織，特色，本学の取り組み」，「附属学校園の役割」，「教員養成のしくみ」についての説明，平成27年度運営委員・新任教員の紹介，「FDセンターの目指すもの」の説明がなされた後，平成27年度の附属学校園の公開研究会や教育実習の日程説明を行った。

２　第１回教育サロン

７月14日（火）の第１回教育サロンでは，新任学部教員を囲み，附属小学校の公開研究会に参加して感じたことなどについて，フリートークを行った。また，附属小学校教諭より「附属小学校における授業の実際と授業研究の概要」と題する発表があり，小学校における授業研究の意義と概要，授業実践報告の視点から，附属小学校教育実習資料『新教師へのとびら』等を使いながら説明を行った。

３　第２回教育サロン

第２回教育サロンは，教育実習Ａ･Ｂ終了後の12月18日（金）に開催された。ここでは附属学校園での教育実習の授業参観や授業研究会で感じたことを中心に，様々な面から大学と附属学校園との連携について捉え，フリートークを行った。また，それに先立ち，附属小学校から「大学と附属小学校との連携についての『これから』」というテーマでの発表があり，教員養成学部としての大学と附属学校園との連携の現状について具体例を示しながら説明した。

附属小学校教諭による発表の様子

フリートークの様子

報　告

子ども総合サポートセンター事業概要

子ども総合サポートセンター長　懸　川　武　史

1　研究「学びのユニバーサルデザイン（ＵＤＬ）に基づく授業研究の在り方」

ＣＡＳＴ(Center for Applied Special Technology)によるＵＤＬの理念「子ども一人一人の学びを保障する」に基づき，授業実践を通し研究を推進する。今年度ＵＤＬのガイドライン（荒巻訳2015）をフレームワークとし，「ＵＤＬガイドライン－ぐんまモデル－」(吉田2016)を作成した。モデルを元に授業デザインを行い，第２学年及び第６学年算数科の授業を２月に公開した。

2　「訪問相談」※平成27年度支援ケース数：５学校園訪問，76名の児童生徒を支援

様々な，課題を抱える子どもへの対応に多面的に取り組もうとしている県内の幼稚園，保育所，小学校，中学校の依頼に応じて，学級経営アドバイザー（附属小学校スタッフ）と特別支援教育コーディネーター（附属特別支援学校スタッフ）の２名で学校園を訪問する。

3　「研修支援」

県内の教育関係者を対象に，公開研修会の開催や，研修講師の派遣，検査器具の貸出等を行い，それぞれのニーズに応じた研修の機会を提供する。

※　公開研修会として，事例検討型ワークショップ２回，群馬大学公開講座２回を実施し，教育関係者等，のべ62名が参加した。
※　群馬県教育研究所連盟主催の「巡回事例研修会」にて，実践発表を行った。また，特別支援学校公開研究会にて，ポスター発表を行った。
※　検査器具を，２つの団体に，合計５台を貸し出した。

4　個別・グループ・集団指導（年間　９回　開催）

県内の小・中学校に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒とその保護者を対象に，指導・支援を行う。そこで見られた児童生徒の様子を基に，センター・在籍校・保護者の三者が在籍校や家庭でのよりよい支援について検討していく。

※　保護者・在籍校担任等研修会　（１回　開催）

5　平成27年度事業　「報告書」　３月　配付

● 報　告

附属小学校における取組　～提案授業・授業研究会～

学部・附属学校共同研究センター長　**上　條　　隆**

附属小学校では，各教科等部の研究方向に沿った提案授業を実践・公開し，各教科等部の研究の妥当性・有効性について，その授業事実を基に討議することにより，研究の具体化及び一人一人の教員の授業力向上に資することを目的に，11月上旬から２月上旬にかけて提案授業，及び授業研究会を実施している。

各教科等部の研究の方向，及び授業研究会の深化に寄与できるよう，附属小学校における提案授業・授業研究会に，以下のセンター運営委員，あるいは，各教科等の研究協力者の学部教員が参加した。

〈提案授業　参加者一覧〉

役　職	職　員　名	日　時	備　考
教育学部　准教授	宮﨑　沙織　先生	平成27年11月 2日(月)	社会科研究
教育学部　准教授	濵田　秀行　先生	平成27年11月11日(水)	国語科研究
教育学部　教　授	江森　英世　先生	平成27年11月16日(月)	算数科研究
教育学部　准教授	中里　南子　先生	平成27年11月24日(火)	音楽科研究
教育学部　教　授	上原　景子　先生	平成27年11月26日(木)	外国語活動研究
教育学部　教　授	益田　裕充　先生	平成27年12月 4日(金)	理科研究
教育学部　教　授	田中　麻里　先生	平成27年12月 8日(火)	家庭科研究
教育学部　准教授	鬼澤　陽子　先生	平成27年12月10日(木)	体育科研究
教育学部　教　授	懸川　武史　先生	平成28年 1月20日(水)	総合的な学習研究
教育学部　准教授	郡司　明子　先生	平成28年 1月25日(月)	図画工作科研究
教職大学院教　授	山崎　雄介　先生	平成28年 2月 2日(火)	道徳研究

●提案授業は、５校時または６校時（45分間を原則）とする。
●授業研究会は、授業を実施した日の16：30から行う。
●授業研究会は、120分間とし、その内容は、次の時間を目安とする。
・研究の方向及び授業説明・・・・・・・・・・・20分間
・質　　疑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20分間
・討　　議・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65分間
・指導講評・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15分間

平成27年11月26日（木）
外国語活動研究授業の様子

報　告

現職教員の成長を促す温かな学び合いの場

教育実習・実践開発部門　**黒　羽　正　見**

平成27年の「現代的学校教育の課題解決シリーズ2015」の「学び合う仲間による教員研修リレー講座」が，次の日程・内容の通り行われました。延べ参加人数は72名でした。今年度も教員一人ひとりの問題意識に支えられた，温かいつながりのある学び合いができました。大学の先生方の理論知を積極的に自分の実践知に取り入れようと何度も何度も質問を繰り返しながら理解しようと努力する姿勢に，本当に頭の下がる思いで胸がいっぱいになりました。そのような真摯な姿勢で参加された先生方に，改めてお礼申し上げます。

2015　現代的学校教育課題解決シリーズ日程

学び合う仲間による教員研修リレー講座

講　座　日	担当／所属／専門分野	内　　容
第１回講座 5月　9日	13:30～15:00〈昭和女子大学大学院〉 山　﨑　洋　史　教　授／臨床心理学	今，改めてカウンセリングの理論を考察する
第２回講座 5月16日	13:30～15:00〈常葉大学〉 堀　井　啓　幸　教　授／教育経営	学校と家庭・地域の連携を考える ―コミュニティ・スクールの視点から―
第３回講座 5月23日	13:30～15:00〈前東京学芸大学講師・清瀬市教育相談センター教育相談室主任〉 清　水　　勇　講　師／コミュニティ支援	地域と連携した包括的な子ども・家庭への支援
第４回講座 5月30日	13:30～15:00〈群馬大学〉 岩　瀧　大　樹　准教授／スクールカウンセリング	不登校への支援を考える ―スクールカウンセラーとの連携を目指して―
第５回講座 6月　6日	13:30～15:00〈群馬大学〉 日　置　英　彰　教　授／有機化学	理科の視点からくすり教育を考える
第６回講座 6月13日	13:30～15:00〈山形大学〉 木　村　松　子　准教授／ジェンダー論	国語教材から学ぶケアリング
第７回講座 6月20日	13:30～15:00〈群馬大学〉 霜　田　浩　信　准教授／障害児心理学	発達障害児に対する個別の指導計画の作成
第８回講座 6月27日	13:30～15:00〈東京学芸大学〉 佐々木　幸　寿　教　授／教育行政学	教師のための教育法規
第９回講座 7月　4日	13:30～15:00〈群馬大学〉 渡　部　孝　子　教　授／英語教育	小学校外国語活動の可能性を広げるアプローチ
第10回講座 7月11日	13:30～15:00〈群馬大学〉 黒　羽　正　見　教　授／教師教育	生き抜く力を育む教育課程へのアプローチ ―地域を巻き込みながら創る教育課程経営―

ここで，各講座に参加した先生方の感想を紹介させていただきます。

・今悩んでいる自分に勇気をいただきました。改めて，教師の学級経営はまさに暗黙知で行っているなと感じました。その暗黙知を広げたり深めたりしていくためには，自己更新していく必要性を感じました。

・認知行動療法を不登校の事例で問題解決の取り組みをシュミレーションできて，分かりやすかった。自分の事例に活用できればと思います。

・「英語を教える」という考えも重要であるが，特に小学校では普通の教科教育に上乗せしていくという考えで，より外国語活動の可能性を広げていくことができると思います。

・化学と生物など理科につながっていた。ＶＴＲがとても興味を引くもので，自分の研究の考え方にも繋がっていて，奥が深いと感じた。

・今，改めてカウンセリングの理論を考察する。この貴重な学びに参加でき，エリックソンの研究について，今後さらに調べてみたいという思いがこみ上げてきました。

・今回で３回目の参加でしたが，よい復習の機会でもあり，新たな気づきもあり，とても良い機会となりました。法規の研修はいつ聞いても充実した気持ちになれます。

・現場で日々子どもの授業のみを考えている一教員には，広い視野をもつ良い機会となりました。保護者との会話はできても，対話はできません。対話ができるようになるための方途の一つにコミュニティスクールがあるのですね。

かつては，多くの学校で先輩教員が若手教員の授業実践を臨床的に指導するという「授業研究を継承する文化」が存在していました。しかし，苛烈な競争主義社会の中で教師の仕事は過酷さを増す一方で信頼や敬意は失われ，教職の専門性開発の中心である校内研修は衰退・形骸化を余儀なくされています。結果的に教師の豊かなパーソナリティは圧迫され，教職への自信や精神的ゆとりさえも奪い取られている様相が窺えます。今の学校教育に対する自身の問題意識を大切にして共に学び合い，高め合ながら，今日の教師受難の時代を一緒に乗り越えていきませんか。平成28年度も先生方の主体的な参加をお待ちしています。

● 報　告

教育臨床心理部門の取組

教育臨床心理部門　岩　瀧　大　樹

○　教育臨床事例検討会

教育臨床心理部門が開催する「教育臨床事例検討会」は，５年目の取り組みを迎えることができました。今年は教員・スクールカウンセラーのほか，臨床心理士・精神保健福祉士などのライセンスをもつ方もメンバーに加わり，より多面的・多角的な事例検討会が提供できたととらえております。以下，新進気鋭の若手カウンセラーより寄せられた，本事例検討会への感想をご紹介します。

県内公立学校スクールカウンセラー　高橋　ちひろ 先生

スクールカウンセラーとして２年目の私は，いまだ不安や戸惑いの連続で仕事をしています。そのような中，月に１回のこの事例検討会では，事例に対する見立てや，専門職としての関わり方等を様々な角度から教えていただけるだけでなく，発達障害や不登校支援といった今日的な話題のある情報などでも，多くの示唆が得られています。

また，事例も多様であることから，自分が携わっている子どもや保護者支援へのヒントが広がり，自分だけでは気付くことの出来ない多くのことを学ばせていただいています。

県内公立学校スクールカウンセラー　勅使河原由季 先生

「事例検討会」と聞くと学生時代を思い出して身震いしますが，この会は，温かい飲み物やイチオシのお菓子と一緒に自由に発言ができる，岩瀧サロンというような温かい雰囲気でした。

実践的なアドバイスをいただいたり，話し合われたことを持ち帰って考えたりすることで，自分のケースについてもより深く振り返ることができました。新人であることを言い訳に，的外れな発言もあったかと思いますが，どんな発言も丁寧に扱ってくださり，この会の雰囲気こそ支援者としてのあり方であるように感じました。ひとり職場での不安な毎日でしたが，困った時は皆さんと話し合ってみようと思って参加できる場所のあることが心強かったです。

○　体験的科目における地域貢献

今年度は，昨年度に引き続き，赤城青少年交流の家において，２年生33名が１泊２日で「秋のアウトドアフェスタ」の運営をサポートし，来場した幼児から小学生の子どもたちと触れ合うとともに，いかに「楽しく」「効果的に」「安全に」サービスが提供できるかを，体験を通じて学びました。

参加学生たちは，子どもたちと楽しむとともに，関わりにおける安全性の配慮，事前計画や準備の重要性，子どもの発達段階に応じた説明の必要性，予想外の反応に対する柔軟性など，多くのものを得ておりました。この経験を，来年度の教育実習，さらには教員として，社会人として，自己のキャリアに活かしていけることを期待しています。

報　告

群馬大学教育実践研究 33 号発行のお知らせ

紀要編集委員長　佐　野　　史

群馬大学教育実践研究は，今年もＣＤに保存した電子データでの配布となりました。紙媒体のよいところは，机の上に置いておくだけで，冊子の内容が，表紙の執筆者・題目一覧等から見えてくるところです。ただＣＤに保存し配布した場合には，その表紙すら人目に付かないということも生じてきます。そこで，このニュースレターの場をお借りして，33号の題目ならびに代表執筆者の一覧を掲示いたします。これと思った論文がありましたら，配布しましたＣＤまたは大学ＨＰを開いて関心のある論文を読んでいただけたら幸いです。

題　　目	代 表 著 者
教員養成系学部の地理学実習科目へのGIS導入の効果と課題 ―群馬大学教育学部社会専攻「地理学実習」における実践報告―	青山雅史
明視野で細胞骨格を観察できる植物細胞のプレパラートの作成	佐野（熊谷）史・六本木太一郎・高橋直之
台湾における総合学習領域「芸術と人文」と我が国の音楽科教育への示唆 ―現地における聞き取り調査の分析を通して―	吉田秀文・千明昇平
音楽鑑賞における有効な視聴覚資料に関する一考察 ―インターネット媒体による学生の受け止め方を中心に―	山崎法子
インクルーシブアート教育システム構築のための覚え書き	茂木一司
フラットホーム@中之条ビエンナーレ2015 ―群大美術+同特別支援学校×アーティストによるアートカフェとワークショップの実践―	喜多村徹雄・茂木一司・手塚千尋・菅野　剛・新井洋美 高橋初穂・深須砂里・園田樹里・内田望美・塩川　岳
Gの杜プロジェクト「かこ・いま・みらい」（2） ―美術館と大学との連携はどのような成果を生んだのか―	春原史寛・喜多村徹雄・茂木一司・宮川紗織・深須砂里 相良　浩
技術・家庭科の連携に関する授業実践 ―箸と箸袋づくりの授業実践における生徒の集中状態―	岳野公人・守田弘道・小林陽子
イギリスにおけるＰ scales 活用の課題　―Maple d own School を例に―	出井南奈帆・浦﨑源次
中学生における所属する部活動と他の学校生活の関連性の検討 ―中学２年生を対象とした質問紙調査の分析から―	鈴木　翔・歌川光一・金澤貴之
教育現場における手話の扱われ方に関する ―考察 ―鳥取県と群馬県の手話言語条例の比較より―	二神麗子・金澤貴之・任　龍在
実習校生徒評価を通じた教職大学院教育の成果と課題 ―現職院生の工業高校での実習・研究を事例として―	新藤　慶・矢島　正・髙橋　望・柴山和宏
小学校算数科における「説明」と「振り返り」　―認知心理学からの検討―	佐藤浩一
推敲の形態が手続き的説明文の産出に及ぼす影響 ―相互推敲を取り入れた検討―	大濱望美・佐藤浩一
思考の言語化が洞察問題解決に及ぼす影響	大川　愛・佐藤浩一
算数科における問題解決促進のための学習支援の工夫 ―文章題解決の４つの下位過程に着目して―	飯塚佳乃
学びのユニバーサルデザインによる授業デザイン	懸川武史・加藤涼子
「道徳科」をめぐる動向とそれへの対峙	山崎雄介
群馬県版校務支援標準システムの導入とその効果分析	矢島　正・髙橋　望・新藤　慶・三好賢治・二宮一浩
中学生の英語学習に対する動機づけはどのように変化するか ―英語イマージョン教育を受ける中学生と公立中学校の生徒を比較して―	清水真紀・山口陽弘
中学校における「伝えたいことをまとまりのある英文で表現する力」を育てる指導の工夫 ―単元の到達目標をルーブリックによって明確にし、毎授業を関連づける活動を通して―	金子公江・山口陽弘・石川克博
幼児の運動発達を促す教師の役割	中村　崇
アクティブ・ラーニングを取り入れた、図工・美術の鑑賞の授業 ―「活動」と「教師の手立て」の視点から―	森坂実紀人・中原靖友・豊岡大画
小学校体育授業におけるタブレットＰＣの効果的な利用方法に関する検討 ―個人種目を対象にして―	吉井健人・大友　智・深田直宏・梅垣明美・南島永衣子 上田憲嗣・宮尾夏姫・友草　司・西田純一

● 報　告

センター協議会・全国教育実習研究部門会議・資料室利用状況

教育実習・実践開発部門　黒　羽　正　見

■国立大学教育実践研究関連センター協議会への参加

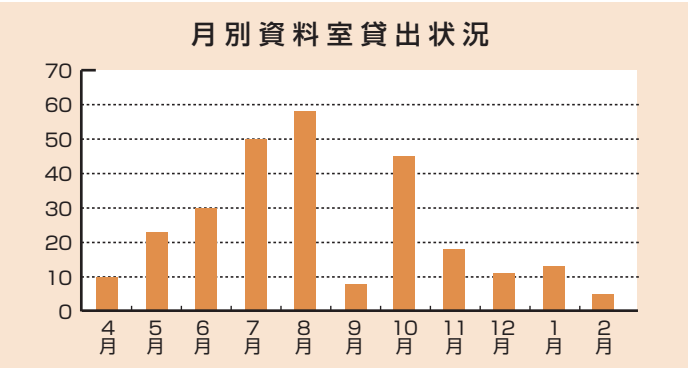
平成27年９月24日に横浜国立大学で開催された第87国立大学教育実践研究関連センター協議会に参加してきました。午前中は各部門の活動状況や計画に関する報告があり，教員養成カリキュラムや教職大学院，ＩＣＴ関連等が話題にあがりました。午後は各大学の活動報告と各部門会議がありました。各大学の報告では教職大学院設立による実践センターの改組・縮小の内容がほとんどでした。大学の教育学部が教員養成だけでなく，地域の教育力向上と教育課題解決に寄与することが求められている今日，生き残りをかけた各実践センターの果たす役割に関して活発な論議が展開されました。また平成28年２月16日に東京学芸大学で開催された第88国立大学教育実践研究関連センター協議会の総会では，最初に文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長の柳澤好治氏より，教員養成の改善・充実についての講演がありました。特に，少子化が進むこれからの教育学部が取り組むべき課題，一般学部とのオリジナリティの違いの出し方，学部における教育を担う教員の力量形成に向けた様々な施策，全国の教職大学院の今後の在り方等，各教育学部の厳しい状況の中で教員養成分野における目指す型や強みをさらに一層明確にしていくこと，グローバル社会で求められる力の育成に関すること等を重点に話がありました。続けて行われた総会では，教育臨床部門，教育実践・教師教育部門，教育工学・情報教育部門の活動状況の報告，全国のセンターで取り組んでいる事業等に関する情報交換が行われました。各センターの改組内容，教育実習や学校ボランティアの在り方，教職実践演習の進め方，教育委員会との連携の在り方など，各大学の特色ある取組の報告がありました。

■日本教育大学協会　全国教育実習研究部門会議

平成27年10月９日の埼玉大学における第29回全国教育実習研究部門会議に参加してきました。今回は32大学54名の参加者と教職実践演習の取組が２本，教員の力量形成が１本，学部教育実習の取組が２本の合計５の実践発表・実践報告がありました。参加者を小集団に分けての総合協議会では，小中教員免許双方の取得をめぐる動き等の新しい動きへの対応，クオーター制導入への対応，メンタル面に課題のある学生への対応，の３点から活発な論議が展開されました。特に発達障害のある学生から，「実習指導教員に問題があります。パワハラです」という訴えも聞かれ，事前相談，実習生の納得，実習中の対応，サポート体制作り等，細かな対応が必要な時代になったという指摘がありました。

■センター資料室の利用状況

本センターの資料室は，学生や教職員の皆様に利用が可能です。とくに全国の教育実践センター紀要や群馬県内の小中学校で使用されている教科書，道徳副読本，教師用指導書，学習指導書編，附属DVD-ROM，附属CD-ROM等があります。教育実習準備，卒業・修士論文や教育実践報告の参考文献をはじめ，さまざまな教育実践や研究活動にご活用下さい。



センター紀要は当センターのホームページからも検索可能です。今年度の教科書教材やセンター紀要論文の利用状況の詳細は，左グラフの通りです。教育実習のための教科書類は充実しているので，多くの学生に活用して欲しいです。また，カリキュラム管理室（県内の小中学校の学習指導案等の整理・保管）が整いました。指導案作成の際，効果的に活用して下さい。

● 報　告

次年度へ向けた取組の紹介

教育実習・実践開発部門　**黒　羽　正　見**

■平成28年の「現代的学校教育の課題解決シリーズ2016」の「学び合う仲間による教員研修リレー講座」の事業内容が，下記の通り決まりました。リレー講座の詳細については，各学校へ案内ポスターを配布し，当センターのホームページでも掲載しています。多数の参加をお待ちしております。

2016　現代的学校教育課題解決シリーズ日程

学び合う仲間による教員研修リレー講座

講　座　日	担当／所属／専門分野	内　　容
第１回講座 5月14日	13:30～15:00〈常葉大学〉 堀　井　啓　幸　教　授／教育経営	アクティブ・ラーニングを活かす教育環境
第２回講座 5月28日	13:30～15:00〈群馬大学〉 岩　瀧　大　樹　准教授／臨床心理学	学校移行・環境移行を支援する ―キャリアカウンセリングの観点から―
第３回講座 6月 4日	13:30～15:00〈山形大学〉 木　村　松　子　准教授／ジェンダー論	変動する学校と道徳・人権教育
第４回講座 6月18日	13:30～15:00〈東京学芸大学〉 佐々木　幸　寿　教　授／教育行政学	実践ニーズに対応した学校法規の運用 ―判例を使って学ぶ―
第５回講座 7月 2日	13:30～15:00〈群馬大学〉 吉　田　浩　之　准教授／生徒指導	いじめ防止対策推進法に則った教育現場の取組状況
第６回講座 7月16日	13:30～15:00〈上越教育大学大学院〉 松　井　千鶴子　准教授／総合的な学習	アクティブ・ラーニングでつくる探究的な学習
第７回講座 10月 1日	13:30～15:00〈群馬大学〉 深　谷　達　史　講　師／教育心理学	学習者のつまずきを考慮した学習支援
第８回講座 10月22日	13:30～15:00〈群馬大学〉 霜　田　浩　信　准教授／障害児心理学	発達障害の子どもへのアセスメントと支援 ―応用行動分析の視点からのアプローチ―
第９回講座 11月12日	13:30～15:00〈愛知教育大学〉 野　平　慎　二　教授／教育哲学	教育思想史の視点から学校教育を語り直す
第10回講座 11月26日	13:30～15:00〈群馬大学〉 黒　羽　正　見　教　授／教師教育	教師が変われば子どもも変わる ―子どもの力を伸ばす教師の構え―

■附属学校教育臨床総合センターの取組

○ 長期研修院における教育研修員・研究協力員の募集

大学の研究知と学校現場の実践知の往還・統合を図りながら，現職教員の資質能力の向上と学校組織の成長をめざした協働的支援活動です。本年度の募集は，教育研修員・研究協力員ともに平成28年度４月１日（金）より随時受け付けます。群馬県内外の先生方による教育研修・教育研究に際して，学校教育臨床総合センターが多少なりともお役に立てれば幸いです。

○ 学校経営サロンのお誘い

このサロンは，現職学校教員と大学教員が学校経営について，日頃考えていること，感じていること等をざっくばらんに語る場です。日々の教育実践あるいは実践をしていく中で感じる疑問など，大学教員とともに語り合いませんか。若手，中堅教員の参加を歓迎します。この自由な語り合いを通して，参加者一人ひとりが少しでも成長できたらいいですね。

○ 個別学習相談事業

この教室では，学校の先生を目指す本学部生が専門的なサポートの下，希望者に個別面接を通じて学習支援を行います。問題の解き方を教わるのではなく，解き方を自分で考えつく力やより良い勉強の仕方を身に付けることを目的としています。私たちといっしょに，自分に適した勉強の仕方を身に付け，楽しく学習することを目指しませんか。

教育研修員・研究協力員の応募方法及び学校経営サロン，個別学習相談事業の参加の詳細については，当センターのホームページをご覧ください。

群馬大学教育学部　附属学校教育臨床総合センターニュース第４号
発行日：平成28（2016）年３月
発行所：国立大学法人群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター
〒371-8510　前橋市荒牧町四丁目２番地　TEL 027-220-7385　FAX 027-220-7381
URL　http://center.edu.gunma-u.ac.jp